学術論文

『ユリシーズ』に内包されたジェイムズ・ジョイスのオスカー・ワイルド像

結　城　史　郎

富山大学人文科学研究第 78 号抜刷
２０２３年３月

学術論文

『ユリシーズ』に内包されたジェイムズ・ジョイスのオスカー・ワイルド像

結　城　史　郎

はじめに

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) とジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) はともにアイルランドのダブリンで生まれたが，ワイルドはイギリス人作家としてロンドンで名声を博し，ジョイスはトリエステ，チューリヒ，パリといった大陸の都市を拠点にして国際的な作家として評価された。両者の接点はアイルランド人であるというだけで，年齢の開きもあり，交流の機会もなかったが，ジョイスにとってワイルドは無視しえぬ同胞の作家であった。ワイルドの文学に惹かれたというより，ワイルドの人生にアイルランドの命運を読み取っていたからだ。ワイルドはオクスフォード大学で学び，ロンドンでイギリス人作家としての地位を確立しながらも，同性愛という「著しい猥褻行為」[1)]を犯したとして1895年に2年の刑を宣告され，出獄後3年にしてパリで最期を迎えた。このワイルドの悲劇はジョイスにとって，イギリスの弾圧に屈する，まさしくアイルランド人の象徴と思えたのだろう。

本稿ではそうしたワイルド像をめぐり，ジョイスの『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922) を参照枠として，両者の関りを探ることにする。ワイルドの人生はジョイスにとって，アイルランド人作家が帯びる運命を映す，まさしく鏡像となっていただろう。まずは『ユリシーズ』の主人公スティーヴン・ディーダラスの独白を取りあげ，「宮廷道化師」(court jester) というワイルドの役割を検討したい。これはオクスフォード大学への進学から投獄されるまでの間，イギリスに媚びたワイルドの文学的営為を要約するジョイスの評言でもある。次に宮廷道化師というスティーヴンの意識の背後に潜む，アイルランド人を蔑視するイギリスの文化論へとその文脈を広げたい。さらにワイルドについてのスキャンダラスな報道に対するジョイスの憤懣をめぐり，法廷での審理の流れを纏めておくことにする。そしてジョイスが『ユリシーズ』に投影したワイルド像について，『ユリシーズ』のもう一人の主人公レオポルド・ブルームを取りあげ，両者の接続を試みるつもりである。こうしてジョイスもワイルドもアイルランドを離脱した自発的な亡命作家として，国家という枠の外に立つ作家であったとの結論で括りたい。

（1）宮廷道化師としてのワイルド

アイルランド人でありながら，イギリスでその文学を評価された作家たちは，「宮廷道化師」と呼ばれている。この名称は王侯貴族の寵愛を受けた「道化師」にちなんだものであるが，オ

リヴァー・ゴールドスミス (Oliver Goldsmith, 1730-1774)，リチャード・ブリンズリー・シェリダン (Richard Brinsley Sheridan, 1751-1816)，そしてジョージ・バーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) に至る，喜劇作家の総称として用いられている。支配者のイギリス人に媚びる被支配者のアイルランド人作家への蔑称でもあるが，アイルランドには出版社もなく，その作品を評価する読者もいなかった。ジョイスはイギリスという国家の内部で軽妙な喜劇を書いたアイルランド人作家の一人としてワイルドを挙げているが，「宮廷道化師」にもそれなりの都合があることは承知していた。

ジョイスのワイルドに向けた「宮廷道化師」という呼称は，評論「オスカー・ワイルド――『サロメ』の詩人」(“Oscar Wilde: The Poet of *Salomé*”, 1909) で使用されている[2)]。『サロメ』はワイルドが1891年にフランス語で書いた劇で，英訳されたが聖書に関わる作品として，イギリスでの上演は禁止された。そこでリヒャルト・シュトラウス (Richard Strauss) が1905年にオペラ化し，1909年にトリエステで上演されることになった。ジョイスのワイルドについての評論はその折に新聞記事として掲載されたもので，『サロメ』について語ったものではなく，タイトルの通り作者ワイルドについての短いながら抑制のある評論である。「オスカー・フィンガル・オフラハティ・ウィルズ・ワイルド」(Oscar Fingal O’Flaherie Wills Wilde) という壮大な名前の由来を手始めに，両親のこと，オクスフォード大学入学から唯美主義の信奉者としての幕開け，アメリカやイギリスでの講演，雑誌編集者，宮廷道化師としての演劇界への華々しいデビュー，そして名声を博して間もなくの同性愛という罪状での投獄といった経緯を述べている。ジョイスは続けて，ワイルドがイギリス当局の贖罪の山羊であったことや，釈放後の悲惨な死，あるいは罪という問題へと論を広げている。

ワイルドに対するジョイスの「宮廷道化師」という評価の背景には，イギリスとアイルランドとの間の力学が潜んでいる。アイルランドは800年にわたりイギリスの植民地支配下におかれ，劣等民族としてゴリラやキャリバンなどになぞらえられてきた。そうした力学を覆そうとしたのがアイルランドの民族主義で，19世紀末には文化民族主義の運動として，文学，スポーツ，言語といった領域でも，脱イギリス化の動きが進んだ。ダグラス・ハイド (Douglas Hyde) の1892年の講演，「アイルランドの脱イギリス化の必要性」(“The Necessity for De-Anglicizing Ireland”)[3)] はそのマニフェストである。ワイルドとは無縁の運動であったが，近年，ワイルドも「アイルランド人作家」と評価されている。イギリス人作家という仮面を纏うことで，アイルランド人という被支配者が抱えた抑圧を隠していたとする視点によって立ち，アイルランド文学との接続が試みられるようになったのである。

ダブリンのメリオン広場にはワイルドの銅像が設置され，その近くの生家は今やオスカー・ワイルド研究センターになっている。母親は詩人で，スペランザ (Speranza) というペンネームを用い，愛国主義的な詩を発表しただけでなく，アイルランドの民話にも関心があった。父親

は外科医でありながら，母親と同じくアイルランドの民話収集も行っていた。そうした背景の下，ワイルドも語り部としての才能を示し，アイルランド民話にも関心を持っていた。ワイルドがイギリスを拠点としていたこともあり，リチャード・エルマン (Richard Ellmann) が『オスカー・ワイルド伝』(*Oscar Wilde*, 1987) で軽妙なデカダントの同時代人として蘇らせるまで，アイルランド文学研究の対象外の作家とされてきた。しかしながら，1990年代以降のポストコロニアル批評の到来により，アイルランド的な資質を備えた作家として，自国の文学者として復位させる試みが広がり,「アイルランド人作家」というワイルド像が定立されることになったのである。

近年のそのようなワイルド受容の背景には，対イギリスというアイルランドの力学が潜んでいる。「アイルランド人作家」としてのワイルド評価には，アイルランド側の民族意識が含意されているためだ[4)]が，ワイルドは国家という枠に留まることのない作家であった。ワイルドは芸術の自律性を説いた唯美主義者であり，作品と民族意識とは無縁であることは承知していたはずである。ワイルドの書評などに散見する，アイルランド自治を支持したと思われる愛国的な内容も, 自治を支持する掲載紙に迎合した記事であると指摘する批評家もいる[5)]。『サロメ』もフランス語で書かれたほどで，パリを拠点にフランス人作家として承認される可能性も十分ありえただろう。

そうしたワイルド評価を再評価する手がかりとして，『ユリシーズ』におけるワイルド像を取りあげたい。主人公のスティーヴンは第2挿話で，生徒を相手に，“pier” が “a disappointed bridge” だと冗談めかしている。そして自らの機知に満足し，晩の酒宴の席で，スティーヴンとマリガンの住居であるマーテロ塔に逗留している客，イギリス人のヘインズを喜ばせてあげようかとしばし思案する (U:2.39)[6)]。第1挿話でアイルランドの芸術が「召使のひび割れ鏡」(“The cracked lookingglass of a servant”) (U:1.146) だといった旨のスティーヴンの警句にヘインズが感動し，彼がスティーヴンの機知を収集したいと語っていたためで，自己喧伝の契機であるのだが，スティーヴンはそうした卑屈な役割を撤回する。彼はイギリス人に媚びようとする自らの行為が,「宮廷道化師」と同じであると思えたらしく，こう自嘲している。

> For Haine’s chapbook. No-one here to hear. Tonight deftly amid wild drink and talk, to pierce the polished mail of his mind. What then? A jester at the court of his master, indulged and disesteemed, winning a clement master’s praise. Why had they chosen all that part? Not wholly for the smooth caress. For them too history was a tale like any other too often heard, their land a pawnshop. (emphasis added, U:2.42-47)

スティーヴンのこの独白にワイルドの名前が挙げられているわけではないが，イギリス人へ

インズへの言及からして，スティーヴンが宮廷道化師としてのワイルドを連想していることは間違いない。第1挿話のマーテロ塔で，マリガンがスティーヴンに実家の召使からかすめたひび割れた鏡を向け, “The rage of Caliban at not seeing his face in a mirror” (U:1.143) と嘲笑していた。これはワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1891) の序言にある，リアリズムとロマンティシズムへのワイルドの警句への引喩である。キャリバンはシェイクスピアの『テンペスト』(*The Tempest*, 1611) に登場する怪物で，リアリズムでは実際よりも醜く，ロマンティシズムでは実際よりも美しく映るため，いずれの鏡もキャリバンを映せないの意である。スティーヴンはキャリバンのような自らの風采を意識しながらも，文学的手法をめぐるワイルドの警句をアイルランドの芸術論に広げ，現実を映し出すことのない「召使のひび割れ鏡」と応じたのである。スティーヴンが想定する「召使」は言うまでもなく，イギリスの支配下にあるアイルランド人の意である。

ワイルドは1900年に亡くなっている。『ユリシーズ』の一日が1904年6月16日のダブリンを舞台にしていることから，その悲劇はいまだ登場人物たちの記憶に真新しく，スティーヴンもイギリスから放擲された「宮廷道化師」として，ワイルドを想起しているだろう。同じくマリガンもワイルドについて想いめぐらし，アイルランドの芸術がひび割れ鏡であるとするスティーヴンの皮肉を暗黙のうちに了解している。そしてワイルドに倣い，陰鬱なアイルランドのヘレニズム化を語る。アイルランドはイギリスの支配下にあり，その文学は対イギリスという政治色を潜在させているため，現実を映すことのないひび割れ鏡である。スティーヴンはそう語ったが，マリガンはその暗い文学観を無視し，スティーヴンの寸言のみを取りあげる。そしてイギリス人のヘインズにその寸言を聞かせることになる，というのが物語の流れである。だが，マリガンはスティーヴンの寸言がワイルドの「嘘の衰退」(“The Decay of Lying”, 1889) からの引用[7] であることを知らないし，その寸言を耳にしたヘインズも知らない。スティーヴンは黙しているが，彼らの無知への蔑みによるところが大である。

マリガンとヘインズはオクスフォード大学の校友という設定であり，ワイルドの人生の転機もオクスフォード大学であったが，スティーヴンがマリガンのアイルランドのヘレニズム化という言葉に批判的であるのは，単なる階級コンプレックスによるだけではない。マリガンの軽薄な言動への嫌悪であるとともに，アイルランドを侮蔑するイギリスの文化論にも辟易しているからでもある。たとえば，スティーヴンはワイルドが学んだモードリン・カレッジを連想しながら，学寮内での学生の喧噪に気づくこともなく，外で芝を刈る近視眼的なマシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-88) の姿を想像する。これもスティーヴンのイギリスの文化論への皮肉である。

Young shouts of moneyed voices in Clive Kempthorpe’s rooms. Palefaces: they hold their

ribs with laughter, one clasping another. O, I shall expire! Break the news to her gently, Aubrey! I shall die! With slit ribbons of his shirt whipping the air he hops and hobbles round the table, with trousers down at heels, chased by Ades of Magdalen with the tailor's shears. A scared calf's face gilded with marmalade. I don't want to be debagged! Don't you play the giddy on with me!

Shouts from the open window startling evening in the quadrangle. A deaf gardener, aproned, masked with Matthew Arnold's face, pushes his mower on the somber lawn watching narrowly the dancing motes of grasshalms. (emphasis added, U:1.165-75)

スティーヴンは心の内に鬱屈を抱えているらしい。アイルランド芸術がひび割れ鏡であるというのは，同胞の作家であるW. B. イェイツやJ. M. シングたちのアイルランド文芸復興運動を指すだけでなく，スティーヴンの文学観にも対イギリスという敵意が潜在しているからである。彼はそうした自らの姿勢を第9挿話のシェイクスピア論に投影することになるが，イギリス人のヘインズや彼に同調するマリガンへの嫌悪にも，その鬱屈が示唆されている。それはアイルランド人の作家を包み込むイギリスの文化論とも関わっていた。

（2）アイルランドをめぐるイギリスの文化論

スティーヴンが想定しているマシュー・アーノルドは，『文化と無秩序』(*Culture and Anarchy*, 1869) で，キリスト教を信奉する禁欲的なヘブライイズムに対して，開かれたギリシア精神のヘレニズムを取り込む必要性を説いた。芝を刈るという行為はアーノルドのそうした文化論を示唆しているが，建物内の騒乱も聞こえず近視眼のアーノルドを想い描くのは，その文化論に対するスティーヴンの皮肉に他ならない。『文化と無秩序』で語られているのは，文化という共同体を構想しなければ社会は無秩序に陥るということだが，この議論にスティーヴンが懐疑的であるのは，アーノルドがアイルランドと無秩序を等価にしているからだ。事実，『パンチ』などのイギリスの雑誌において，アイルランド人はゴリラやキャリバンであるだけでなく，無秩序の表象として戯画されていたのである。

実のところ，アーノルドは『文化と無秩序』を刊行する2年前，『ケルト文学研究について』(*On the Study of Celtic Literature*, 1867) を著している。アングロ・サクソン族の文学はケルト族の感性によって補完されていると論じた。前者が事実に立脚しているとすれば，後者は想像力に溢れている。イギリス文学はこの二つの民族の融合によって生まれているとしたのがアーノルドである。この著書が基礎となり，オクスフォード大学にケルト研究の講座が誕生したように，影響力のあった論説である。ヘインズのケルトの民話への関心も，マリガンとの出会いも，オクスフォード大学でのケルト研究の講座を契機としているはずである。そうしたアーノルドにスティーヴンが不信感を抱くのは，アイルランド人は想像力に溢れながらも事実に疎く，国

家を統治する能力に欠けており，イギリスのアイルランド支配には必然性があるといった結論に至るからである。事実，アーノルドはアイルランド自治には否定的であった。アーノルドの文化論は文化と無秩序という対比のみならず，アングロ・サクソン族とケルト族という図式においても，単純な二項対立を基礎にしている。

アーノルドの前にはフランスの宗教学者エルネスト・ルナン (Ernest Renan) の『ケルト人種の詩とその他の研究』(*The Poetry of the Celtic Races, and Other Studies*, 1859, tr. 1896) があり，アーノルドはその影響下にあったが，ルナンのケルトの概念は幅が広く，アーノルドのような二項対立には陥ることはなかった。事実，ルナンはさらに『国民とは何か？』(*What is a Nation?*, 1882, tr.1939) を著し，国民と民族を切り離している。こうした論争に鑑み，W. B. イェイツが「文学におけるケルト的要素」(“The Celtic Element in Literature”, 1898) で，ケルトについての再定義を試みた。ケルト的な要素はイギリス文学に回収されるべきものではなく，ヨーロッパ文明の古層をなすものだと論じたのである。ワイルドが出自について語ることは少ないが，自らが想像力に富むケルト人であることは否定していない[8)]。

ひるがえって，ワイルドはダブリンのトリニティ・カレッジで古典学を学び，さらにオクスフォード大学のモードリン・カレッジに入学し，古典学の知識を深めた。その当時のワイルドの学問への情熱は，『オスカー・ワイルドのオクスフォードにおけるノート』(*Oscar Wilde's Oxford Notebooks*, 1989)，あるいは『ヘレニズム』(*Hellenism*, 1979) などの復刻本に窺うことができる。マリガンがアイルランドのヘレニズム化を語るのは，ヘレニズムをめぐる深い知識によるというより，開放的なオクスフォード大学に惹かれたためである。それと対照的に，スティーヴンが芝を刈るアーノルドを想起するのは，その文化論の背後にある，アイルランド人蔑視を意識してのことである。スティーヴンがイギリス人を「青白い顔」と評するのも，オクスフォードの学生たちと一線を画するためである。

スティーヴンがワイルドを批判しているわけではない。イギリスの支配下にあるアイルランド人の一人として，「宮廷道化師」という役割に懐疑を抱いているにすぎない。スティーヴンは『若い芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916) の最後で高邁な理想を抱き，ギリシア神話のダイダロスのように，アイルランドという迷宮から大陸への離脱を試みながら，帰国し再度の離脱に想いめぐらしている。桟橋が「失望の橋」であるのは，大陸と接続していないだけではない。アイルランドは質屋にも等しく，すべてのものがイギリスの抵当に入っているためである。したがって，すべての港もイギリスの支配下にあり，大陸に連結するものではない。ワイルドの「宮廷道化師」としての役割に懐疑的でありながら，自らの経済的な窮乏に鑑み，その文学的営為を否定するには至らない[9)]。

スティーヴンは終始ワイルドに憑かれ，その作品の断片が独白に鏤められている。第9挿話のシェイクスピア論の基礎でもある『W. H. 氏の肖像』(*The Portrait of Mr W. H.*, 1889) の他，評

論や詩，あるいは法廷で取りあげられたワイルドの同性愛の相手アルフレッド・ダグラスの詩「二つの愛」(“Two Love”, 1894) などへの言及もある。これらはスティーヴンがワイルドの文学に関心を示していただけでなく，その人物像にも興味を抱いていた証でもある。ジョイスはスティーヴンとワイルドとの接続を試みた後，さらにブルームの同胞からの疎外という文脈で，ワイルドの社会からの放擲という問題を取り込んでいる。ジョイスのワイルドの悲劇に対する憤懣は，スキャンダラスな報道記事に鑑み，無視しえぬ問題であったのだろう。ジョイスもアイルランドから疎外され，その心象を『ユリシーズ』のもう一人の主人公ブルームに投影し，同時にワイルドへの共鳴を示唆したのである。

（3）ワイルドの裁判

ジョイスのワイルドに対する共鳴を論じるに先立って，孫のマーリン・ホランドの著した実録『オスカー・ワイルドの真の裁判』(*The Real Trial of Oscar Wilde*, 2004) を参照しながら，まずはワイルドの裁判を顧みたい[10]。裁判は3回開かれた。第1回目の公判は1895年4月3日～5日までで，ワイルドが交際していた，アルフレッド・ダグラスの父親クイーンズベリー侯爵に対する，ワイルド側からの名誉棄損の告訴であった。クイーンズベリー侯爵から，「男色家を気どるオスカー・ワイルドへ」(“To Oscar Wilde posing as a Somdomite(sic)”) という中傷のカードが渡されたためであるが，審理の間に地下世界でのワイルドの同性愛が発覚したため，ワイルド側は敗訴した。この時の被告側の弁護士はトリニティ大学でのワイルドの同窓生の保守派のエドワード・カーソン (Edward Carson)[11] で，著名な作家という仮面の下にある，ワイルドの隠された人物像を暴いてみせた。

こうしてワイルドは敗訴しただけでなく，検察によって裁かれることにもなった。敗訴した直後に審理の内容が検察に送られ，ワイルドは夕刻に逮捕され，刑務所に収監されたのである。こうして第2回目の裁判が4月26日～5月1日まで行われた。この度は刑事事件としてワイルドが裁かれることになったのだ。ワイルドと関りを持ったとされる人物の審理から開始されたが，陪審員が評決を下せず，5月7日に2人の人物が保証人としてワイルドの保釈金を支払い，次の審理まで猶予を与えられた。その間，ワイルドは国外逃亡を勧められたが，応ずることなく3回目の審理が5月20日～26日まで開かれ，重労働をともなう2年の懲役刑が下されることとなったのである。

ホランドが述べているように，ワイルドの裁判に先立って，1857年にフランスで二つの猥褻裁判が開かれた[12]。ギュスターヴ・フロベール (Gustave Flaubert) の『ボヴァリー夫人』(*Madame Bovary*, 1856)，およびシャルル＝ピエール・ボードレール (Charles-Pierre Baudelaire) の『悪の華』(*Les Fleurs du mal*, 1857) をめぐる裁判である。社会の風紀を乱す紊乱な描写が告発されたのである。これらの作家たちはいずれも，自らの作品が社会道徳とは無縁であると主

張し，法廷で発言することはなかった。それと対照的なのがワイルドであった。ホランドは『オスカー・ワイルドの真の裁判』の序文で，破滅の道を選んだ祖父ワイルドに対して，しかるべき釈明を求めている[13)]。詐欺まがいの審理の罠に陥った，ワイルドの内実を測りかねてのことだろう。事実，名誉棄損というワイルドの告訴は，逆に自らの名誉を棄損されるという，漸降法的な結審で幕を閉じることになったのだ。

ワイルドの第１回目の公判では，『ドリアン・グレイの肖像』(*A Picture of Dorian Gray*, 1891)をめぐり，前年1890年の雑誌掲載版が取りあげられ，その主人公ドリアン・グレイの犯罪が問われた。だがワイルドは被告側の弁護士カーソンのいずれの尋問に対しても，言葉巧みに答弁し，“novels and life are different things”[14)]と述べた。文学者としてしかるべき反論であり，ワイルドの私人としてのスキャンダラスな事実が提示されないかぎり不毛な審議であった。そのカーソンがワイルドを圧倒することになったのは，「男色家を気どる」という曖昧な評言の論証を放棄し，事実の領域に立ち入ったためである[15)]。裁判が開始された3日目のことで，カーソンは作品をめぐる尋問を突如として諦め，チャールズ・パーカーやアルフォンソ・コンウェイといった，まさしくワイルドと関りのあった人物の名前を挙げ，実生活での罪状へと審理の流れを向けたのである。

ホランドのワイルドの悲劇に対する疑問は，こうした不毛な審理を顧みてのことと思われる。事実の立証に向けて，クイーンズベリー側がワイルドと関わったと思われる人物の証言を得るため，自白を強要し，あまつさえ日当を支払っていたのである。そのような状況に鑑み，ホランドは著名な作家として人生を賭けてまで裁判に臨んだ，祖父ワイルドの真意に疑問を抱かざるをえなかったのであろう。著名人としての殉教とも言われている。ワイルドも死後に刊行された書簡『獄中記』(*De Profundis*, 1905/1964) で，“I was a man who stood in symbolic relations to the art and culture of my age”[16)]と回顧している。同性愛の殉教者として神話化されるような響きの文言であるが，ワイルドの告訴は著名人という驕りによる失策というのが実情である。

ジョイスも先に挙げた「オスカー・ワイルド――『サロメ』の詩人」で，判決後の大衆の反応について，“His fall was greeted by a howl of puritanical joy. On hearing of his condemnation, the mob that was gathered in front of the courthouse began to dance a pavane in the muddy street”と語っている。そしてスキャンダルの報道記事が氾濫し，家族も離散し，友人にも見放されたことに対する憤懣を露わにしている。それに加え，ジョイスはドリアン・グレイの犯したのは同性愛であるとするジャーナリズムの批判をめぐり，“What Dorian Gray’s sin was no one says and no one knows”とのワイルドの自己弁護に賛同している[17)]。これは1890年７月９日に『スコッツ・オブザーヴァー』紙の編集長に宛てた文面の一部で，審理で『ドリアン・グレイの肖像』が取りあげられた折にも繰り返された。ワイルドは7月23日にも，“It is the spectator, and not life, that art really mirrors” との文面の手紙を送っている[18)]。いずれも作者と作品とは異なる旨の唯美主

義者としての文学観に基づくものである。

ジョイスがワイルドの文学を支持していたことは，自らもワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』を念頭に入れた，『若い芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916) を執筆していたことからも推してしかるべきである。両作品のタイトルが類似しているだけではない。ジョイスも主人公に個人が囚われている“nationality, language, religion” (P 220) からの離脱を宣言させている。さらに作品とは無縁の芸術家について，“The artist, like the God of the creation, remains within or behind or beyond or above his handiwork, invisible, refined out of existence, indifferent, paring his fingernails” (P 233) と語らせている。

ワイルドが国外への逃亡を無視したのも，文学者としてイギリスという国の道徳観への挑戦であったのだろう。ジョイスは以下のように，ワイルドをイギリスの贖罪の山羊と評するにあたり，「告発に対して有罪であろうと無罪であろうと」という留保を付している。

> Whether innocent or guilty of the charges brought against him, he was undoubtedly a scapegoat. His greatest crime was to have caused in England a scandal; it is well known that the English authorities did all they could to persuade him to flee before issuing an arrest warrant against him. In London alone, declared an official of the ministry of the interior during the trial, over twenty thousand people are under police surveillance, but they remain at large until such time as they cause a scandal.[19)]

実のところ，ワイルドの裁判は，当時の首相アーチボールド・フィリップ・プリムローズ (Archbald Philip Primrose) を含め，著名人の同性愛が囁かれていた折のことでもあった。ワイルドの同性愛の相手アルフレッド・ダグラスの兄がその相手とされ，罪の発覚を恐れ自殺したと言われている。したがって，ワイルドの罪を見逃すなら，イギリス社会の階梯が崩れることにもなりかねない。ワイルドに重刑を科すことで，当局はこの社会問題に決着を図ろうとしていたのである。ジョイスによると，ロンドンだけでも警察の監視下に２万人以上の人間がいるが，スキャンダラスを起こさないかぎり投獄されることはないという。ワイルドに下された重刑は，国外に逃亡することなく，その狭隘な司法に挑んだことへの報復であったのだろう。

（4）『ユリシーズ』に投影されたワイルド裁判

ジョイスのワイルド論の筆致は淡々としているが，細かな情報も盛り込まれている。新聞記事を含め，ワイルドに関わる報道の詳細を知っていたのだろう。そうした関心の高さによって立ち，ジョイスは『ユリシーズ』にワイルドを示唆するシーンをタペストリーのように鏤めた。第9挿話では，マリガンはスティーヴンに，ブルームの同性愛者の眼ざしを“thou art in peril.

Get thee a breechpad" (U:9.1211) と警戒を発している。また第16挿話では，同性愛者らしき船乗りがギリシアの青年の絵姿の入れ墨を示している。スティーヴンとブルームの父と子の関係にも同性愛が含まれていると思われるが, ここではスティーヴンとワイルドとの関りから, ブルームに投影されたワイルド像へと視点を向けることにする。そして両者を接続する手がかりとして，名誉棄損の訴訟，法廷での巧みな答弁，私的な事実の公開について検討したい。

たとえば，ブルームの元恋人の夫デニス・ブリーンは，"U.p." (U:8.98) と書かれたハガキを受け取り，名誉棄損で訴訟をしようとしている。"U.p." とは「破滅」の意で，差出人は匿名であるが，クイーンズベリーがワイルドに残したメモと同じく，個人を侮蔑ものであることに変わりはない。ブリーンはダブリンの変人の一人で，社会的地位も低いものの，この一枚のハガキをめぐり，訴訟の手続きを目論む。そして『ユリシーズ』ではこの人物と妻のことが繰り返し前景化されている。ワイルドも変人であったように，ブリーンも社会から奇異な眼ざしで見られており，社会の他者化のメカニズムを示唆する存在でもある。

第12挿話では酒場の外を歩くブリーンとその後に続く妻の様子が，二つの文体で併記されている。壮麗な文体と俗悪な文体である。文体の相違によって内容も異なっている。司法に関わる夫とその令夫人という夫婦であるとともに，訴訟を目論む奇怪な変人とその被害者としての妻という，対照的な描写である[20]。

> . . . there passed an elder of noble gait and countenance, bearing the sacred scrolls of law and with him his lady wife a dame of peerless lineage, fairest of her race. (U:12.246-48)

> . . .bloody old pamtaloon Denis Breen in the bathslippers with two bloody big book tucked under his oxter and the wife hotfoot after him, unfortunate woman, trotting like a poodle. (U:12.253-56)

ブルームの元恋人の内輪にあることからして，ブリーンも同じく社会から疎外された異端者であるだろう。中傷のハガキを受け取り，名誉棄損の訴訟を企むところは，ワイルドと変わりはない。ワイルドの転落も名誉棄損の訴訟に発している。妻コンスタンスが惨めな最期を遂げたのも，ワイルドの無分別な行動によるところが大きい。ブリーンの妻についての「麗しき女性」と「不運な惨めな女」という対照的な描写には，時の経過にともなう没落も含意されており，その零落にはワイルドの妻のコンスタンスへのジョイスの憐憫が投影されているように思われる[21]。第12挿話には，ワイルドの母親の「スペランザ」(U:12.539) のみならず，ワイルドを敗北させた「クイーンズベリー」(U:12.958) の名前も挿入され, ワイルド裁判のタペストリーを示唆してもいる。

そして酒場の内側の客たちがブリーンを嘲笑しているところで，フリーメイソンなどと同じ

く疎外されているブルームが入って来る。知人の死亡保険についての相談役として，この酒場でもう一人の相談役と合流することになっていたためで，酒を飲むのが目的ではない。が，偏狭な民族主義者たちからの攻撃を受ける。彼は第5挿話で，読み終わったので新聞を「捨てる」(“throw away”，U：5.537) とつぶやき，それを聞いたある人物がアスコットゴールドカップの競争馬「スローアウェイ」の意だと誤解しことが事の始まりである。事実，ダークホースであったその馬が勝利し，ブルームが賞金を稼いだとの噂が広まったのだ。こうしてブルームは賞金を手に入れたのに，酒を振舞うことをしないとして，吝嗇な部外者と見做されるという流れである。

ブルームに「国民」をめぐる問いが発せられるのはその折である。彼は“What is your nation if I may ask?” (U:15.1430) と問われて，“I was born here. Ireland” (U:15.1431) と即答している。ここでのブルームの自己弁護は法廷でのワイルドの答弁を想起させる。実のところ，ブルームはユダヤ人の血を受け継いでいることを公言するだけでなく，キリスト教徒が崇めるイエス・キリストもユダヤ人であると宣言しているのである。ブルームはこれまで寡黙であったが，攻撃を受けると実に能弁になる。ワイルドが訴訟で期待したのも，法廷を劇場化しようとする意図であっただろう[22)]。

さらに私的な事項が重要な意味を帯びる例として，幻想的な第15挿話でのブルームに対する審問がある。この挿話は抑圧されている問題が浮き彫りにされる設定であり，警察官を目撃したことを契機として，ブルームのアイデンティティをめぐる審問が開始される。そしてブルーム宅のかつてのメイドの証言など，彼の隠された数々の罪が暴かれる。妻の外出中でのこと，ブルームがそのメイドに言い寄りながら，撃退されたという逸話である (U:15.860-94)。こうした些細な出来事が積み重ねられ，人格を貶める審問が始まり，死刑の判決が下される。それに加え，ブルームの救世主願望も些事によって審級され，その幻想が実現したところで，私的な事実が証拠として提出されている。たとえば，新聞社でレネハンが語った地口を披露したために“Plagiarist !”(U:15.1734) と告発されている。私的な情報が公的な罪へと連動する範例である。ワイルドの審問でも私信を含め秘匿されるべき情報が公開された。

ジョイスのワイルドへの関心は新聞報道への関心の高さによるものである。実のところ，『ユリシーズ』には多くの時事問題が取り込まれている。フィーニックス公園で無敵革命党の一味による，アイルランド長官と次官が暗殺された1882年のフィーニックス公園暗殺事件もその一つである。第7挿話の新聞社の場面でその事件が話題にされ，第16挿話はその事件に関わった人物が経営するカフェが舞台になっている。もう一つはアイルランドの政治指導者であったチャールズ・ステュアート・パーネル (Charles Stuart Parnell, 1846-1891) の不義密通である。特に後者は不義密通事件というスキャンダラスな問題としてジャーナリズムを賑わしたが，これはパーネルがフィーニックス公園暗殺事件を教唆したとの誤報を発端としている。アイルラ

ンドの自治権獲得へ向けたパーネルの運動へのイギリスの策謀であっただろう[23)]。ワイルドもパーネルの審理に関心を寄せ，公聴会に参加していた。

これらの事件は人々の記憶として刻印されているが，事件そのものが『ユリシーズ』と結びついているのはパーネルの密通事件である。道徳に厳しい時代でのこと，カトリック教会によって1890年末に党首として適任でないとの決定を下され，パーネルは政治生命を奪われ，失意の内に亡くなった。パーネルと相手の女性の関係は公然の秘密であったが，女性の夫は政治家で金銭的な目的での離婚訴訟であった。不義密通は一大スキャンダルで，ジョイスは『ユリシーズ』の背景として用いているが，ブルームの妻である歌手のモリーも興行主のブレイゼス・ボイランと密通するという設定にしている。

実のところ，ブルームは妻の密通について知っていて心を苛まれているが，物語の最後に配置された第18挿話は，性をめぐるモリーの大らかな独白で終わっている。亭主の存在を無視するパーネルと比較して，主役のブルームは妻に間男される亭主であり，その位置づけは曖昧である。彼は自らの家庭に想いをいたすことなく，間男されながらも毅然としたパーネルに心酔し，情熱的な女性とのその密通を容認している。パーネルは離婚訴訟の後，相手の女性と結婚していることから，ブルームのパーネルに対する大らかな視線も無理からぬものがあるが，自らの妻の不義に対するブルームの寛容さはあまりにも単純である。

事実，ブルームは妻の不義密通に想いをめぐらし，その動揺に “Envy, jealousy, abnegation, equanimity” (U:17.2155) という順で折り合いをつけている。この論理は個人的であるよりも抽象的なものであるが，社会の部外者とされている道化役の人物の温かさを感知することもできる。しかし家庭の日常が今後とも変わらないという保証はない。『ユリシーズ』は円環の物語であると結論づけられるわけではない。ブルームは第12挿話で自らをユダヤ人であると公言している。その主張が瞬く間にダブリン市内に広がり，市民たちの批難を受ける可能性は高い。ブルームの能弁は妻の不義密通と関わっていることから，同性愛という嫌疑に対して能弁であったワイルドの悲劇が想起される。

おわりに

ジョイスがダブリンを舞台にしながら，ユダヤ人の血を受け継ぐブルームを描いたことは奇妙であるが，『ユリシーズ』の対象とする1904年のアイルランドにはユダヤ人蔑視があった。ブルームはそうした国家の内実を抉る格好の人物である。アイルランド人は「自国」という狭隘な概念に縛られている。ブルームは墓場へ向かいながら，自殺のことが話題にのぼり，“They have no mercy on that here” (U:6.345-46) とつぶやいている。ブルームの意識では，アイルランドは「ここ」にすぎず，他者の住まう自閉的な地である。ブルームのモリーへの寛容な姿勢はそうした意識を背景にしているのかもしれない。国家という枠と家庭という枠が相同であるわ

けではないが，物語はそうした枠を問題にしている。

ワイルドもジョイスと同じく国の枠の外側に立った作家である。彼は1891年にフランスの作家エドモン・ド・ゴンクール (Edmond de Goncourt) に宛て，「イギリス人が私にシェイクスピアの言葉を話すようにさせた」[24] 旨を語っている。同年にはフランス語で『サロメ』を書いているが，これはフランス語への共鳴であった。ワイルドにとってイギリスも，あるいはアイルランドも，自国というよりは，恣意的な国であったのだろう。ワイルドも「宮廷道化師」という自らの役割があくまで暫定的なものであることを知っていたはずである。ジョイスもその役割に疑問を付しながら，否定するに至らない。両作家ともアイルランドの離脱者という地平においては変わらない。

註

1）Joseph Bristow, “biographies: Oscar Wilde − the man, the life, the legend”, *Oscar Wilde Studies*, ed., Frederick S. Roden (New York: Palgrave, 2004) 7, 21-27.

2）James Joyce, “Oscar Wilde: The Poet of *‘Salomé’”, James Joyce Occasional, Critical, and Political Writing,* ed., Kevin Barry (Oxford: Oxford UP, 2000) 148-51. Margot Gayle Bachus はこの評論をスキャンダルという側面で再考している。“‘Odd Jobs’: James Joyce, Oscar Wilde, and the Scandal Fragment”, *Joyce Studies Annual* (2008): 105-45.

3）Douglas Hyde, “The Necessity for De-Anglicizing Ireland”, *Irish Writing in the Twentieth Century: A Reader*, ed., David Pierce (Cork: Cork UP, 2000) 2-12. この論文の後半には脱亜入欧を唱える日本への揶揄がある。

4）たとえば，David Coakley, *Oscar Wilde: The Importance of being Irish* (Dublin: Townhouse, 1994) など。

5）Anya Clayworth, “Reviewing a Recalcitrant Patriot: Oscar Wilde’s Irish Review Reconsidered,” *Forum in Modern Language Studies* 33.3 (2002): 256, 258. 掲載紙がアイルランド自治を支持する『ペル・メル・ガゼット』であり，信用できないという理由のため。

6）引用は James Joyce, *Ulysses* (London: Bodley Head,1986) により，以下，慣例により挿話・行を記す。*A Portrait of the Artist as a Young Man* (London: Penguin, 1992) からの引用は P とし，頁番号を記す。

7）Oscar Wilde, *The Collected Works of Oscar Wilde* (Hertfordshire: Wordsworth, 1997) 933. シリルがヴィヴィアンに，“You think it would reduce genius to the position of a cracked looking glass. But you don't mean to say that you seriously believe that life imitates art, that life in fact is the mirror, and art the reality?” と尋ねている有名な箇所である。これを知らないことはマリガンの知識も疑われてしかるべきである。

8）Anne Markey, “Wilde the Irishman Reconsidered: ‘The Muses care so little for geography!’”, *ELT* 57.4 (2014): 443-62.

9）スティーヴンはケルトの立場から Ascendancy に怨念を抱いていたと指摘されているが，ワイルドにはそうした敵意を向けていない。John Eglinton, *Irish Literary Portraits* (London: Macmillan, 1935) 42.

10）Merlin Holland, *The Real Trial of Oscar Wilde* (New York: Perennial, 2004). 第 1 回目の公判の全貌を記録している。

11）Edward Carson はアイルランドの独立に反対の立場にあったことで知られている。Margot Gayle Backus 127.
12）Merlin Holland xxxv.
13）Merlin Holland xxxiv.
14）Merlin Holland 103.
15）Sean Latham, *The Art of Scandal: Modernism, Liberal Law and the Roman à Clef* (Oxford: Oxford UP, 2009) 67.
16）Oscar Wilde, *The Complete Letters of Oscar Wilde,* ed., Merlin Holland with Rupert Hart-Davis (New York: Henry Holt, 2000) 585.
17）James Joyce, *James Joyce Occasional* 149.
18）Oscar Wilde, *The Complete Letters* 441.
19）James Joyce, *James Joyce Occasional* 150.
20）第 12 挿話では，同じ対象をめぐる壮麗と俗悪という対照的な描写が並置されているが，時系列は問題にされていない。しかし擬古典的な文体と現代の俗語の対照という点から，両者の間に時の流れが含意されていると考えたい。
21）James Joyce, *James Joyce Occasional* 150. ジョイスはワイルドの妻が質屋に通い，隣人から借金していたことに同情を寄せているが，これはジョイスの家庭と同じである。
22）Merlin Holland xxxiv.
23）James Joyce, “The Shade of Parnell”, *James Joyce Occasional* 191-96.
24）Oscar Wilde, *The Complete Letters* 504-06.